

平成23年度 第5回心理学教育FD／ICT活用研究委員会 議事概要

I. 日時 : 平成24年2月6日(月) 10:00~12:00

II. 場所 : 私立大学情報教育協会 事務局 会議室

III. 出席者: 木村委員長 金子委員 今井委員 大島委員 中澤委員
(事務局) 井端事務局長 森下主幹 松本職員

IV. 議事概要

1. 検討内容

(1) 学士力の実現に求められる教育改善モデルについて

事務局より、本日の検討事項について説明がなされた。

1. 各委員会で教育改善モデルを提案したが、理事会でPDCAのサイクルを回すための仕組みが必要だと指摘があった。それに応え、教育改善モデルを点検・評価・改善してゆくための基準を4~5行で表現していただきたい。

2. 検討内容

その後、具体的議論に入り、次のような意見が出された。

- ・4年生を卒業時点で評価しても遅いので、毎回の授業の中で常に振り返りを行い、授業を改善していくようにすべきでないか。
- ・良い評価とはシラバスどおりに授業を行うことなのか。脱線するからおもしろい授業になるのではないか。
- ・授業は教員のものという考えを変えていきたい。
- ・シラバスを教員同士でチェックする仕組みが必要でないか。重複する部分を調整すれば、科目数を制限することができる。今までは議論の対象にはなかったが、原点に戻り、考え直すべきでないか。
- ・教員がチームで授業の内容を点検する。一人の教員の点検では他の授業との関連性に欠ける。
- ・到達度を確認する成績評価は客観テストだけでよいのか。卒業時に口頭試問をすべきではないか。学びの仕方、本質的な学びをしているかがわかる。
- ・授業の可視化を実践できるのはICTである。可視化の方向に持っていきながら、まとめられるのではないか。
- ・シラバスが紙媒体のみの場合や、ネットでしか確認できない場合があり他の教員のシラバスを見るだけでも手間がかかる。
- ・他教員の授業を見学するのは無理に近い。それについての話し合いも難しいことからICTを活用し、シラバスや資料、授業内容をデータベース化して見ることはできないだろうか。
- ・シラバス通りの授業を徹底しすぎると、誰が教えても同じ授業になってしまうの

でないか。

- 教員同士のチームで授業をするのは、最終目標となる学士力なども個々に違うので、現実的には難しいのではないか。
- チームを組むと本来の教育の突発的な発展がなくなるのではないか。思想性や面白さがなくなるのではないか。
- チームで一律のことをやる必要はないと思うが、何を教えたかなどの最低限の知識の共有は必要ではないか。
- 授業ごとに小テストをし、教員がフィードバックを受けるのはどうか。
- チェックリストを作るのはどうか。試験とは別に評価シートで、自分でできたかどうかをチェックさせるのはどうか。
- 評価シートはICTを活用して基礎・応用の教員が見られるようにすることで連携ができるのではないか。
- シラバスには授業の目的を書くが、授業ごとに何が身に付くかをはっきりさせるべきでないか。
- 学習ポートフォリオは学生の評価軸で書かせると真実を書かないことが多く、誰もチェックしないので、書きっぱなし状態になっている。教員の評価軸で書かせる評価シートは、客観テストや筆記試験も含むが、教員が示したゴールについて書かせるため、学習ポートフォリオと照らし合わせ真実がわかる。できていないところをネット学習や補習授業を受けさせるようにするのはどうか。枠を与える際に嘘を書くとか口頭試問で困ることをわからせれば真実を書くのではないか。
- 教員が枠を与えてしまうと、逆に真実を書かず、一律同じことを書いてくるのではないか。正解が何か、どう書けば評価されるかなどを考えてしまうだろうし、何がわからないのかがわからないので、簡単に書けないのではないか。自由に書かせることで逆に細かく書く学生もいる。
- ある学校では学生にわからないことをさらけ出させ、支援センターに相談に行き、補完させている。ポイント制度と用いて、ポイントを貯めれば学長褒賞がもらえるので9割の学生は満足している。
- 特に理系は基礎がわからないと次の授業がわからなくなるのでその制度は活用できるが、心理学の場合は基礎がわからなくても、応用の話は聞けるので、モチベーションが上がりにくいと思うが、宿題などでわからないところを支援センターで教えてもらうような仕組みができることは望ましい。
- ベースに関しては客観テストで評価し、ポートフォリオは学生の特質や誤解を認めながら使うのはどうか。
- 最低限度の評価軸、心理学教育検定のような評価シートがあつてよいのではないか。その上で、基礎と応用の教員が連携し、意見交流をして、学びをチェックしていくのはどうか。

- ・関連する教員が意見を出し合うときに、仲が良いと意見を言いづらい、本音を言えない、ということもある。そのような場合、私情協や学会のような第三者機関やコンソーシアムで意見を伺い、振り返りに反映させるのはどうか。

などと意見があり、最終的にまとまった文案は下記のとおりである。

心理学教育改善モデル（その1）

授業の点検・評価・改善

基礎心理学担当の教員と応用科目担当の教員が連携して作成した到達目標について、客観的に評価できる評価シートを共有し、定期的に点検・評価を行う。また、学協会、団体のコンソーシアム等を通じて、中立的な立場からの示唆的な意見も取り入れながら、各教員が役割分担して改善の方法を検討する。

教育改善モデル（その2）について

教育改善モデル（その1）の文案をもとに、下記視点を盛り込み、まとめた。

- ・様々な領域の教員間及び社会の専門家が連携する協働作業を前提とする。
- ・社会に関与する力を身につける。

授業の点検・評価・改善

この授業の点検・評価・改善は、教員による授業の評価シートと学生による学習ポートフォリオを組み合わせ、担当教員と心理学以外の幅広い学問領域の専門家や有識者の参加を得て、ネット上で到達目標の達成度について意見交流できるようにする。その上で、学内外の有識者に中立的なピアレビューを依頼し、その意見を参考にして行う。

その他に「授業のねらい」を下記のとおり修正した。

授業のねらい

心理学の領域ごとの学びに重点がおかれてきたために、心理学の関連科目間と心理学以外の領域との関連付けが十分でないため、新たな発想を展開することが困難であった。ここで提案する授業では、関連科目間及び他領域の科目と連携した学びの統合化を図ることで、心理学的な手法を用いて科学的に問題を整理・分析し、問題解決のための発想ができることを目指す。

(2) 今後のスケジュールについて

今年度の検討内容は今回委員会で終了とし、来年度は今回作成したモデルをもとに、モデル実現のための教員の教育力について検討し、冊子刊行に向け編集作業を行う。

V. 次回の開催日程

日時：平成24年4月以降に開催（メーリングリストにて調整）